

## 質の高い大学教育推進プログラム 実施状況報告書

大 学 等 名	酪農学園大学		
取 組 名 称	酪農場での長期実習を組み込んだ新教育方式		
申 請 区 分	教育方法の工夫改善を主とする取り組み		
取 組 期 間	平成 20 年度 ～ 平成 22 年度 （3 年間）		
取 組 学 部 等	農食環境学群 循環農学類	取組担当者	森田 茂
W e b サイト	http://www.jissen-rakuno.jp/		
取 組 の 概 要	本取組は、大学から離れた現地で長期実習をしながら単位を取得する「実践酪農学コース」である。学内の講義や実習で学ぶだけでなく、実際の農業・酪農の現場での実習を通して体得することにより、現場が欲しい即戦力的な人材を育成することを目的とする。座学と現地実習を交互に実施するサンドイッチ方式を採用し、実習先でもネット等を利用した遠隔授業や、現地で実施する集中講義によって、座学の学生と同等の単位を取得することができる。		

### 1. 取組の実施状況等

#### ① 取組の実施状況 【1 ページ以内】

本取組は、大学から離れた現地で長期実習をしながら単位を修得できる新しいカリキュラム「実践酪農学コース」である。酪農学科の3コース（酪農・肉畜・植物）のうち、酪農コースのサブコースとして、2005年度に設けた。実践酪農学コースの実施状況は次のとおりである。

- 1 年前期：農業者らを講師に招いて開講する実践酪農学（座学）。まずは現場の実際をわかりやすく習得させる。
- 1 年後期：実践酪農学演習（大学内で行う予備実習）で長期実習に備える。
- 2 年前期：実践酪農学実習 { 現地で1回目の長期（4ヶ月間）実習 }
- 2 年後期と3 年前期：大学内で一般科目
- 3 年後期：実践酪農学実習 { 現地で2回目の長期（4ヶ月間）実習 }
- 4 年生：一般科目と卒業研究等

#### 酪農コース

乳牛の飼養や繁殖などの乳生産の科学と技術、酪農場の物質循環について学ぶ。

- 乳牛飼養学
- 放牧利用学
- 乳利用学

#### 実践酪農学コース

酪農場での実践的な教育と実習により、酪農の担い手を育成する。

- 実践酪農学
- 実践酪農学演習
- 実践酪農学実習

#### 肉畜生産コース

肉牛、豚、鶏、羊、馬などの肉畜の高度な生産を専門的に学ぶ。

- 肉牛飼養学
- 肉用家畜飼養学
- 肉利用学

#### 植物生産コース

循環農業を基盤とした高度な作物生産を専門的に学ぶ。

- 食用作物学
- 園芸学
- 作物保護学

本コースを選択した学生は、上述したように2年前期と3年後期に大学（江別市）から遠く離れた十勝地方や釧路地方の優れた酪農家で長期間の実習を行っている。実習中は電子メールを利用した遠隔授業と現地で実施する集中講義とを併用し、座学の学生と同等に卒業に必要な単位を修得できる体制を整えている。

取り組みに参加している教員と学生の数は次のとおりである。

- 実践酪農学コース担当教員 3名（教授と准教授）
- 学内での予備実習（演習）科目担当教員 10名（教授、准教授）
- 現地に出張して集中講義を行う科目担当教員 8名（教授と准教授）
- 学生数
  - 学内での座学（実践酪農学） 1学年あたり約180名
  - 学内での実習（実践酪農学演習） 1学年あたり約25名
  - 現地での長期実習（実践酪農学実習ⅠⅡ） 1学年あたり4～9名

本取組の内容は、大学案内をはじめ、オープンキャンパスや専用のホームページで外部へ情報を発信しており、実践酪農学コースで学ぶために本学を受験する学生も現れている。教育G P事業を通して、札幌や東京でシンポジウムを開催したほか、全国各地の農業高校等へ本取組のパンフレットや冊子を配布することができた。報道各社にも働きかけ、新聞報道は数回、NHKテレビ（道内）でもニュースの中の特集で取り上げられた。

なお、学生の受入等で協力頂いている浜中町や滝上町と本学は、地域総合交流協定を締結している。

## ② 取組の成果 【1ページ以内】

本事業を実施したことにより、得られた具体的な成果は、以下のとおりである。

- 1) 酪農場での長期実習（4ヶ月×2回の実践酪農学実習ⅠⅡ）の中で、科目担当教員を派遣して行う現地での集中講義は、公開授業や検討会（交流会）として実施した。これはファカルティ・ディベロップメントの一環となり、現場の農業者や畜産関係者の前で講義を行うことから、教員らは緊張感や刺激を受け、授業の資質を向上させる効果が得られた。科目担当教員らの自己評価等は、本取組のホームページ [http://www.jissen-rakuno.jp/05\\_shuuchuu/05\\_shuuchuu.html](http://www.jissen-rakuno.jp/05_shuuchuu/05_shuuchuu.html) に記載している。さらに、地域のニーズが高い現場における公開授業や即戦力のある就農者や後継者の育成にも貢献でき、大学としての社会的責任を果たすとともに、農村地域の活性化につながる公共的役割を担うことができた。現地受入農家の意見は、同ホームページ [http://www.jissen-rakuno.jp/06\\_nouka/06\\_nouka.html](http://www.jissen-rakuno.jp/06_nouka/06_nouka.html) に掲載した。
- 2) 酪農場での長期実習を通して、現場が欲しがると戦力的な人材（専門的な知識だけでなく、総合的・システムの技術を体得し、それを支える考え方・視点をもつ人材）を育成できた。また、座学と現地実習を交互に行うサンドイッチ方式により、学内で学ぶ専門知識と現場での実際が結びつき、教育的効果の向上が図られた。
- 3) 長期実習の中で、JA職員など現場の指導者から話しを聞く機会が増えて、現場の実践的な考え方を学ぶことができ、学生自身が抱える疑問点を補うことができた。実習中に不意の病気や事故などの問題が生じた時にも、学生が現場の関係機関を気軽に頼ることができる環境が構築された。上記2)3)に関する学生からの意見は、[http://www.jissen-rakuno.jp/08\\_kaigiroku/08\\_kaigiroku\\_2010.html](http://www.jissen-rakuno.jp/08_kaigiroku/08_kaigiroku_2010.html) 等、本取組ホームページの意見交換会の議事録の中で紹介している。
- 4) 大学の座学の講義（実践酪農学）に、現地の指導者や優秀な酪農家を講師に招くことにより、大勢の学生が現地の生の声を聞くことができ、現地の様子や新規就農の面白さと大変さなどを理解することができた。現地実習への意欲が高まり、長期実習を希望する学生の増加が図られた。
- 5) 長期実習に備えて、現地での短期予備実習（1週間程度）や学内での演習（実践酪農学演習）を行うことにより、現地での様子や実作業の目的と意味を理解させ、心身共に長期実習に備えた準備をすることができた。
- 6) 酪農場での長期実習の参加学生からの学内報告会を行うことにより、長期実習に参加していない学生にとって、参加学生の気持ちが伝わることで良い刺激になり、今後の取組に反映させることができた。さらに、反省会や意見交換会、評価委員会ならびにシンポジウムを実施することで、本取組の問題点等が抽出され、外部からの評価を得られると共に今後の展開について協議することができた。

2010年までに本コースを修了したのは25名で、7名は就農し、残りの18名は就職したが、そのうち14名はJA等の畜産関係に従事し、4名は人工授精士や酪農ヘルパー等として、即戦力となる現場で活躍している。

本取組の成果を客観的に評価するために、教育GP事業を通じてシンポジウムを札幌と東京で開催し、外部の評価や意見を頂いた。その中の一つとして、本取組は総合教育であり、技術や知識を学ぶだけでなく、人間としての成長に大きく寄与するとの意見が寄せられた。外部評価意見は会議録として、本取組のホームページ [http://www.jissen-rakuno.jp/08\\_kaigiroku/08\\_kaigiroku\\_2010.html](http://www.jissen-rakuno.jp/08_kaigiroku/08_kaigiroku_2010.html) にて紹介している。

なお、計画時の目標として、農業後継者とともに、新規就農者の育成を挙げていたが、現在まで新規就農の実績は得られていない。今後、コースの中に新規就農者育成カリキュラムを設けて、より実践的に学ぶ計画を現在検討している。

### ③ 評価及び改善・充実への取組 【1ページ以内】

本学では昭和36年から道内の農家に住み込んで行う3週間の短期実習（農家委託実習）を酪農学部の必須科目とし、現在も年間約500名の学生が現場で実学を学んでいる。短期実習後のアンケートでは、95%の学生が実習成果ありと回答しており、実践的な人材育成に一定の効果をもたらしている。しかし、3週間という短い期間では、年間を通じた畜産現場での実態を学ぶことはできず、座学と異なる生活環境に慣れるだけで精一杯の場合もあり、卒業後に即戦力として農業を担うまでには至らないという課題も抱えていた。

本取組「実践酪農学コース」は、この問題を補完し、より実践的な人材を育成するために設けたコースであった。3週間の短期実習では、作業を教えるというよりは怪我をさせずに簡単な農作業を経験させることに終始し、お客さんで終わってしまう場合も多い。しかし、本取組（4ヶ月×2回）では、より実践的に農業を教えて、色んな作業を任せることができる、といった意見や評価が受入農家から得られている。

学生の達成度や学習成果については、専任教員が月2回程度、現地で巡回指導し、学生の作業日誌や面談、受入農家との懇談により把握している。長期実習時の習得レベルに関しては、学生の個人差が大きいことと、受入農家の対応が一律ではないため、一定の評価基準は設けていない。例えば搾乳機器の操作をどの程度任せられているか、餌や搾乳と牛の病気に関する知識をどの程度体得しているか、学生自身の興味やメンタル面はどうか等々、様々なポイントから学生の習得レベルを個別に評価し指導を行っている。学生によっては、牛の品評会への出展を目指して日々牛の世話に励んだり、人工授精技術の習得に力を注ぐなど、実習に対するニーズも様々である。

改善すべき点については、農家意見交換会やシンポジウムを通じて、受入農家や学生から様々な意見を頂き、本取組のホームページ等にも記載している。例えば学生側からは、大学でまだ1年しか学んでいない状況下で長期（4ヶ月）実習に出発するのは精神的に不安であるとか、3年生の後期は就職活動ができないといった、改善要望が出されている。受入農家からも、学内での実習準備を充実し、レベルの高い学生を現地に送り出して欲しいといった意見が出された。これを受け、2009年度からは1年生の希望者に1週間程度の現地予備実習を組み入れるなど、関係者のご意見や指摘を受けながらその都度改善策を検討し、本取組の内容や質を高めるよう努力している。

#### ④ 財政支援期間終了後の取組 【1ページ以内】

本取組は、本学が行う実学教育の看板コースとして、財政支援期間終了後も継続して実施していく。教育の質的向上に向けた改善・充実策としては、2011年4月に実践酪農学コースの専任教員（実践農学研究室・准教授）を新規採用したほか、学生のニーズに応じて、農業機械の操作取得などレベルの高いカリキュラムに取り入れ、新規就農を目指すコースを2012年度から追加する検討を進めている。また、本取組に参加しながら、教員免許の取得も目指したいという学生からの要望が多い（現カリキュラムでは両立ができない）ため、長期実習の一部を夏休みや冬休みに行い、学内講義（座学）も他の学生と同様に受けられるコースの検討を進めている。また、将来的には、酪農だけでなく、畑作や水田で長期実習するカリキュラムや、他家畜（肉牛、豚など）に対応した実践コースの新設を目指している。

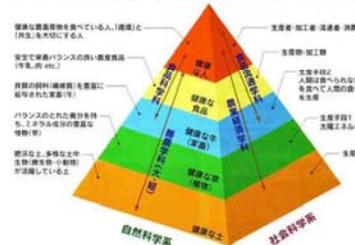
本取組を継続実施するにあたっての一番の課題は、財政面である。現在、遠隔授業のための通信費用（インターネット等）を受入農家にご負担頂くなど、通信費の圧縮を進めている。また、現地で学生の世話や集中講義等の際に学生の送迎を行うアドバイザーの雇用は取りやめ、当面は教員が現地へ出張して対応することとした。受入農家との懇談会や報告会、外部評価を得るためのシンポジウムなどは、財政面から実施は困難である。また、受入農家やJA等へ支払っていた雑役務費（学生への専門的知識の提供等に対する労働対価）も支払いができないため、今後、学生の受入にかかる現地の負担をどうするか、現地の受入機関等と調整を進めていく予定である。



# 酪農場での長期実習を組み込んだ新教育方式 座学と実践のサンドイッチ方式による実学教育

## ○ 取組の趣旨・目的

建学の精神（**健土健民**）とその実践のために



「健土健民」の考え方と各学科の位置づけ

健康な土  
↓  
健康な草  
↓  
健康な家畜  
↓  
健康な食品  
↓  
健康な人

教養や知識だけでなく、**体験的に学び**  
それを現場で生かす「**実学教育**」を重視

古くから農家委託実習を実施

(昭和36年から3週間の短期実習を2年生の必須科目とした)



実践的な人材育成に一定の成果はあるが、現場  
が欲しが即戦力のある担い手を育成できていない  
とは言えない。

新たな取り組みが必要！

大学から離れた現地での長期実習をしながら単位を修得  
できる新しいカリキュラム「**実践酪農学コース**」を2004年  
に設けた。

## ○ 取組の内容・ポイント

前期	学内(実践酪農学・他)
1年 夏休み	現地での短期予備実習
後期	学内(実践酪農学演習・他)
2年 前期	現地(実践酪農学実習Ⅰ・他)
後期	学内(報告検討会・一般科目)
3年 前期	学内(一般科目)
後期	現地(実践酪農学実習Ⅱ・他)
4年 前期	学内(報告検討会・一般科目)
後期	学内(卒論・他)



長期実習に備えて可能な限り予備実習



座学と長期実習を交互に行う  
**サンドイッチ方式**を採用

大学から遠く離れた特色ある地域で 長期実習をしながら単位を取得

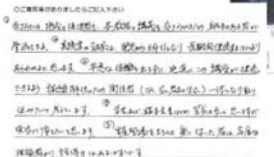


現地公開授業(集中講義)と検討会(交流会)

## ○ 取組の成果

学外から特に評価を得ている公共的役割

- 地域公開授業の実施 (地域に対する社会的貢献)
- 指導者・後継者の育成 (担い手不足・過疎化の減少)



十勝毎日新聞の報道(上) JA・農家に対するアンケート(下)

学内外で評価委員会を実施



本取組の反省点・改善点について様々な意見を頂き、今後の展開(参加学生数の増加や肉牛・畑作コースの新設など)について検討を行っている。

左: 農家意見交換会(2009年2月) 下: 教育GP「酪農学園大学シンポジウム」実践酪農学には2010年2月



- のべ31名の学生が長期実習に進み、現場が欲しが即戦力的な人材を育成できた。
- サンドイッチ方式の採用により、学内で学ぶ専門知識と現場での実践が結びつき、教育的効果が飛躍的に向上した。
- 現地集中講義(公開授業)や検討会(交流会)では、教員自身が現場で学ぶ機会が得られ、授業の質の向上につながった。
- 現地の検討会(交流会)を通じて、地域からのニーズが高い就農者や後継者の育成にも貢献でき、大学としての社会的責任や農村の活性化につながる役割を果たすことができた。